

梅園学会

ニ二ノ 2013. 7 No.160

猛暑の中暑中お見舞

申し上げます

少しばかり遅れたニュース第160号をお送りしたばかりなのにそのまゝお送りしておどろかされたと思ひます。実は委員の小串信正さんの一文をいたゞいていたにも拘らず、その水を失念し、前号を出してしまいました。五月四日付でいち早くいたゞいてたにも拘らず大変失礼をいたゞいてしまひ、急ぎ前号のそのまゝとしてお送りする次第です。梅園の編集生訓の口誤訳の仕上り、解説案の執筆、直前に届いた日 国東の傳人伝 中の「清虚」法師が「受けた衡壁」による「不手際」をした、深くお詫言します。

小串さんおが注意のあつたお手紙に十月二十七日(日)午前日出町野音会館で「藤原室先生没後二百年記念講演会」を開催する旨記しておりました。今年の梅園学会も十月二十六日(土)と二十七日(日)梅園の里と会場にと前回は「あまのり」ので、二七日が重なりてしまいました。また、肉もあきらまひ、梅園学会の二日月をどうするか、委員の皆さんのお意見をきいて決めたと思ひます。小串さんは二日月は右の講演会に合流(共催)し、午後は企画画下りといひ、日出、小浦、鶴崎などの史跡見学に希望者は参加されたは如何かと提案して下さつております。日出は相足卓之、井上大成、小浦は藤原跡、鶴崎は池辺子昌、毛利太夫、毛利宗家記念館、蘭室の宅跡などの見学を二百年祭として今年行われたいと思ひます。

梅園学会報第37号原稿募集
八月末までにフロッピー原稿を事務局までお送りします。すむに柳次郎氏から一本届いてきます。

第37回梅園学会研究発表募集
東京伊豆半島梅園の著生訓の輪読が終りました。著生訓四と日 藤原との密接な関係もハッキリしてきました。この関係の発表が二つ三つ期待されますか、皆さん奮って発表して下さい。

国東の傳人伝の
浜田晃氏による三浦梅園の紹介

前号で今年三月に岩手右のまの申から「清虚」といふ人を紹介しました。岩手からいふと、梅園(浜田氏執筆)を紹介するのが妙味をします。お詫言して色々を紹介します。大人は勿論、子供たちにもわかりやすく梅園の史と生き方を描かれています。五梅園の学問の所は注目しました。四の書き方も見事です。

「文責 小川晴久」

梅園学会の意義と使命

大分県国東市 小串 信正

委員所見
三浦梅園(著・宇安貞は、江戸時代中期に国東半島の寒村(佐藤岡子)手本島(水村)に自適し、医者・詩人・教育者・文学者・書家・自然科学者・社会学者等の万端の才能を発揮した大学者であったことは今更繰返すまでもありません。特に三浦梅園のための学会である「梅園学会」に集う皆さんへは言つのは失礼だと存じます。

しかし、没後二百二十五回忌になる今日、率直に申し上げて、三浦梅園先生は正しく高く評価されていない、その哲学思想である「三浦哲学」は解明されていないと言えませぬ。大正元年には、藤井専隨氏を中心にして地元有志の協力で「梅園全集」(上下全巻)が出版されて百年(昨年)が度百生が経ちました。三枝博首氏(『三浦哲学の眞実』)、小野精一氏(『三浦梅園書簡集』)、田口正治氏(『三浦梅園の研究』)や諸氏の研究業績はありますが、まだまだ不十分です。岩波書店発行の日本思想大系41『三浦梅園』や中央公論社発行の日本の名著20『三浦梅園』などで二級の哲学者としての評価はされて来ていますが、安藤昌益や本居宣長、あるいは福沢諭吉などに比べて、名前も業績も知られていません。

「梅園学会」が発足したのは大きな意義があつたのです。以後、毎年「梅園学会」を開催し、「梅園学会報」が刊行されて来たのは、小川晴久代表委員や各委員、会員各位の御尽力によります。手書きの「梅園学会ニュース」も159号が出されていることにも敬意を表します。委員や会員の所見が掲載される

ようになっていくことも、良い試みだと思ひます。しかし、このところの梅園学会の運営に対して不満があります。全国的にも三浦梅園の研究が退潮しているように思ひますが、特に国東市や大分県においては低迷しています。地元の三浦梅園研究会や大分市の大分梅園研究会も無くなつています。地元(西武蔵)の「梅園祭」は継続して、今年も4月29日に行なわれましたが、それ、このところ毎年「梅園学会」が梅園の里で行なわれるのは、地元として有難いことではあります。これでは「梅園学会」の意義が果せていないと思ひます。「梅園学会」は全国的に三浦梅園を研究し啓蒙していく使命があると思ひます。もつと言へば、世界的にも三浦梅園の存在を知らせ、外国の方が研究されて来ることを啓蒙していかなければならないと思ひます。

それ、ずっと以前から、梅園学会は①地元国東市や大分県、②東京などの首都圏、③地方の都市(大学等の三ヶ所のローテーション)で開催することを私は度々提案して来ましたが、しかし、毎年変わらず梅園の里のみで行なつていたので、会員や委員さえ来なくなつていくのです。まずは、この点を改善していただきたいと思ひます。大変だと思ひますが、各地で開催して三浦梅園を全国に広めていくという使命を果たしていただきたいと思ひます。

次に「梅園学会報」についての意見を申し上げます。まず、学会報への寄稿が余りに少ないことです。寄稿が少ないことにもよると思ひますが、学会報に研究成果を入れるようになりまし。会員にとつては論文よりも研究成果の方が参考になつていくと思ひますが、やはり学会報には会員の研究論文が盛んに投稿されるのが、正規の学会報の姿だと思ひます。「梅園学会報」に論文を寄稿して、一般的には

評価されないというようになってはならないと思ひます。会員各位には、蓄つて論文を書いていただき寄稿されますことをお勧めいたします。

研究成果の発表をするなど言つてはいるのではないのです。その成果は、もし梅園学会で刊行した方が良いでしょう。「梅園書天覧書」のような名称で別的小冊子として刊行すべきではないと思ひます。梅園学会に叢書を刊行する余裕はないと思ひます。刊行費は研究者が分担する他ないと思ひますが、現状で「梅園学会報」が毎年刊行出来ているのは、小川先生の個人的な負担によるようです。この点も問題だと思ひます。梅園学会だけで刊行出来るように改善や工夫をしていかなければならないと思ひます。例えは、その発行部数が毎回千部になつていませぬ。諸事情もあるようですが、現状では、三百部くらいが適当だと思ひます。これまでの学会報は小川先生の事務所に山積みされていられると思ひますが、このことを改善していかなければならないと思ひます。

以後のことは無理で、夢物語になるかも知れませんが、敢えて書いてみます。これからの梅園学会の目標は2023年の三浦梅園の「生誕三百年」にあると思ひます。①今後一番求められているのは、新しい「三浦梅園全集」だと思ひます。梅園学会で出版社に働きかけて、一緒に生誕三百年記念に刊行する。②梅園学会の共同研究・執筆で『三浦梅園の全体的概説』と『三浦梅園の総合的研究』を刊行し、③生誕三百年記念大会を東京で開催することです。地元の国東市を中心に大分県で、二百二十五周年記念祭)に取組んでいますが、この機会に「三浦梅園先生顕彰会」を発会させたいと思ひます。のちに皆様にも御案内したいと思つております。「おぐ」のまきの、平成25(2013)年5月4日 識